

平成 28 年 7 月 1 日  
地震調査研究推進本部  
地震調査委員会

## 黒瀬断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、黒瀬断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 黒瀬断層の特性

項目	特性	信頼度 (注 1)	根拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	黒瀬断層		文献 1 による国近北側の断層。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置		文献 1、地形の特徴から推定。
	(北端) 北緯 34° 22.0′ 東経 132° 43.7′	△	
	(南端) 北緯 34° 20.6′ 東経 132° 41.3′	△	
	地表の断層の長さ 約 5 km 一般走向 N55° E	△ △	
(3) ずれの向きの種類	右横ずれ断層（北西側隆起の上下成分を伴う）	△	文献 1、地形の特徴から推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	△	ずれの向き及び地形の特徴から推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km	◎	D90 による地震発生層の下限深さは 15-20 km 程度。
	下端の深さ 不明	—	
	断層面の幅 不明	—	
(3) 断層面の長さ	不明		
3. 過去の断層活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	不明	—	

(3) 1回のずれ量 (注3)	1 m程度	△	文献2の経験式により推定。
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	
活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模 (注4)	M6.0程度	▲	長さから文献3により推定。
地震後経過率			
(1) 地震後経過率 (注5)	不明	—	

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注2：文献については、本文末尾に示す以下の文献

文献1：活断層研究会編（1991）：「[新編]日本の活断層—分布図と資料—」．東京大学出版会，437p.

文献2：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，55，795-855.

文献3：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第2輯，28，269-283.

注3：経験式によれば、1回の活動に伴う変位量D（m）は、断層の長さL（km）を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注4：経験式によれば、活動時の地震規模M（マグニチュード）は、断層の長さL（km）を用いて、 $M=(\log L+2.9)/0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適応できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注5：最新活動（地震活動）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

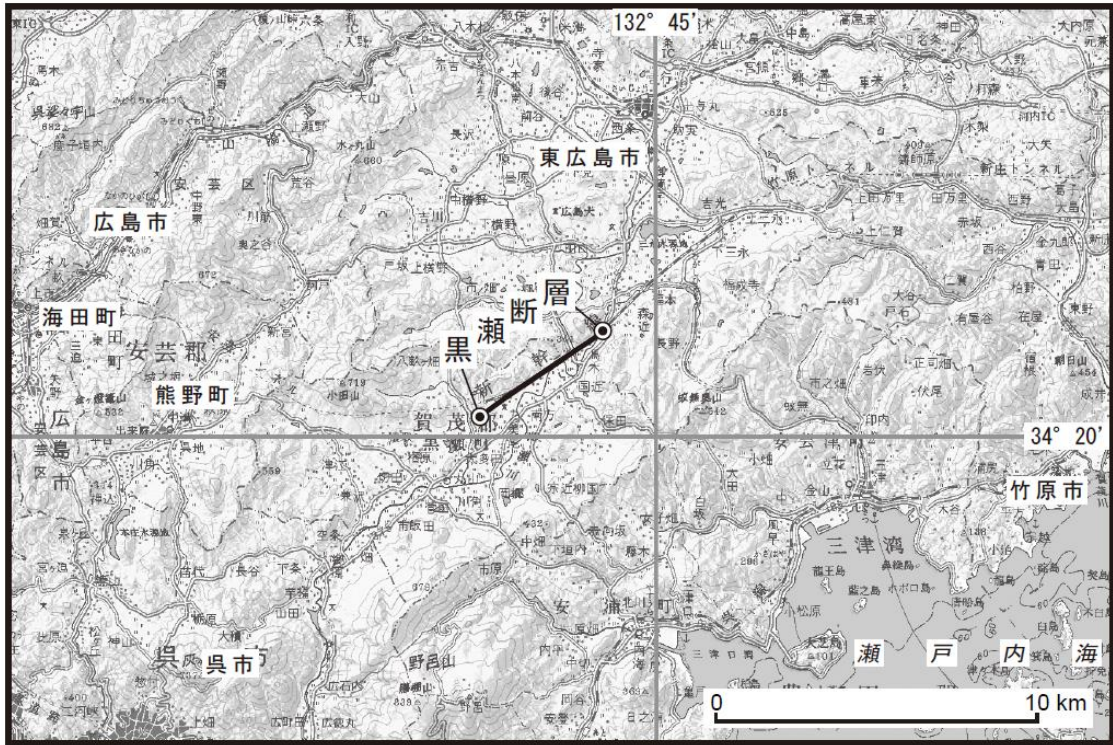


図1 黒瀬断層の位置

● : 断層の端点

基図は国土地理院発行数値地図 200000「広島」